（管理規則第３条実施要領　別紙様式）

２０２５年度（令和７年度）学校評価自己評価表

誠之中学校区	校番３７	福山市立　曙　小学校
最終更新日	2026 年（令和８年）１月３０日	

Ⅰ　福山市

ミッション　　福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン　　各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

Ⅱ　中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容

コロナ禍により、社会情勢や生活環境、子どもたちの生活・意欲・様々なことが大きく変化してきている。
子どもたちの目線で、目標・計画等を設定してほしい。
未来を見つけられる学びとなってほしい。

児童生徒の現状

・地域から学び、理解し、つながろうとしている子どもが増えている。
・相手意識を持った行動が不十分。
・学びへの意欲が低い児童・生徒が一定数いる。
・長欠児童生徒の割合が高い。

育成する力 資質・能力	主体性			
	知識・技能	思考力・判断力	表現力	自主・共生
めざす子ども像（義務教育修了時の姿）	自らに誇りを持ち，夢と目標に向かって頑張る児童生徒			
中学校区として統一した取組等	研究主題　：　自ら考え学ぶ教育活動の創造 校区共通の SDGｓ：１１住み続けられるまちづくり			

Ⅲ　自　校

ミッション　㋕　㋖　㋑

㋕リエイティブ（突破力・発想力）で㋖ンダフル（不思議がいっぱいで素晴らしい）な児童の育成の図るため，㋑ノベーション（授業改善）の推進

学校教育目標

夢と希望を燃やし続ける曙っ子の育成

現　状

＜児童生徒＞
・児童は学びに向かっているが、基礎学力を身につけ学力を伸ばしていくことに課題がある。
・担任・関係職員の支援・協働により、連続欠席が改善傾向の児童が見受けられる児童もいるが」、学校・教室で、自ら学んだり、学び合ったりすることが不十分な児童が少なからずいる。３０日以上の長期欠席者数は３４名、その内、新規欠席者は１７名であった。
・体力テストにおいては、向上している項目もあるが、継続して課題となっている項目も見られる。
＜授業＞
・主体的・対話的な学びのデザインによる授業づくりにより、子どもたちは「授業は、自分に合った教え方、教材になっている」と、概ね好意的に捉えている。
・単元の本質追求に向けて、他者の考えと自分の考えを比較しながら話し合うなど、学びを広げ・深める単元構想・授業展開・評価に課題がある。

育成する力 資質・能力		主体性 知識・技能、思考力・判断力、表現力、自立・共生			
		知識・理解	思考力・判断力	表現力	自立・共生
めざす子ども像	低学年	知りたい情報を人に聞く・本で調べるなどして収集することができる。	自ら課題を見つけ、事象を比較すること等を通して、課題を解決することができる。	自分の考えや意見を、わかりやすく伝えることができる。	自分の考えを持つことができる。 進んで集団生活を行い、地域に愛着を持つことができる。
	中学年	目的に応じて情報を工夫して収集し、情報を選んで、活用することができる。	自ら課題を見つけ、事象を比較・分類すること等を通して、課題を解決することができる。	自分の考えや意見を、三角ロジックを活用してわかりやすく伝えることができる。	自分の考えを持ち、相手の気持ちを考えながら自己を表現することができる。
	高学年	多様な視点から情報を収集し、情報を選んで、経験・知識と結び付けて活用することができる。	自ら課題を見つけ、事象を比較・関係付け・分類すること等を通して、協働して課題を解決することができる。	相手や目的に応じて自分の考えや意見を三角ロジックを活用して説得することができるように伝えることができる。	自分の考えを持ち、相手の気持ちを考えながら自己を表現し、互いの存在や立場を尊重しようとしている。 進んで集団生活を行い、地域に愛着を持つことができる。

研究	テーマ	「自ら問いや考えをもち、伝え合いながら、学び続ける授業づくり」 ～学びに夢中になる子どもをめざして～
	内容等	①　各授業者が、「追求教科・単元」を選び、「子ども主体の学びづくり」にチャレンジする。 ②　校内・チーム体制を整え、「見通し」と「見取り」の精度を高め、研究・研修の充実を図る。
めざす授業の姿		全ての子どもたちが、日々の授業で ・自ら問い（なぜ・どうして？）を持ち、（つなげて）考えている ・目的を明確にして、伝え合ったり聴き合ったりしながら、広げたり深めたりしている ・自らの学びに（見通しを立てたり、振り返ったりしながら）粘り強く学んでいる ・自分やグループの考えを ICT やシンキングツール等を活用してまとめたり、対話したりしている

Ⅳ　目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立　曙　小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る取組状況	プロセス評価	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	プロセス評価	達成評価	総合評価	改善方策
２	確かな学力の向上	★	継続	子ども主体の学びづくりを進め、学力を伸ばす	つけたい力を明確にした単元計画を立て、根拠を明確にした評価の実施をする。 深い単元解釈・分析に基づく単元構成・授業展開の工夫・改善を図り、ＰＤＣＡサイクルを回す。	国語科テストの思考に置いて、平均８０点以上にする。 「児童のつまずきを想定しながら教材研究・授業準備を行っている」教職員を80%以上にする。 （教職員アンケート）	評価をもとに授業改善を行い授業を進めたり、帯タイムで週に２回国語の思考を伸ばす課題に取組んだりした。その結果国語科テストの思考は、79.5点だった。 毎週水曜日教材研究タイムを設けて、学年で国語科を中心に教材と向き合う時間を確保した。その結果、教職員アンケートで、肯定的な回答をした教職員は94.4%だった。	３	３	引き続き帯タイム学習を行う。扱う問題は、児童のつまずきや実態に合わせたものを準備する。 「授業振り返りシート」を作成し、発問や板書などの成果や課題について振り返ることで、個人や学年間での授業改善につなげる。 夏季休業中に行った国語科・算数科の研修における学びを生かして、日々の授業づくりを行う。	児童のつまずきや実態に合った朝学習や、授業を振り返り改善することで、国語科思考テストの平均点は 81 点となり、前回より向上した。 「授業ふりかえりシート」が授業改善につながったと回答する教職員は91.7%、夏季休業中の研修が授業づくりにつながったと回答した教職員は 100%であった。しかし、児童のつまずきを想定しながら教材研究していると回答した教職員は76.5%であった。	４	３	３	国語科だけでなく算数科の朝学習を実施することで、児童の実態をつかみ、授業改善につなげる。 「授業ふりかえりシート」を記録・活用する時間を確保したり、シートを同学年で交流したりすることで、さらなる授業改善につなげる。また、より質の高い授業づくりにつながるよう、教材研究タイムの実施回数や内容等、教職員の意見をもとに改善していく。
２	豊かな心の育成		継続	多様な他者とかかわり合いながら共感的人間関係を築く 不登校の未然防止を図る	日々の学級活動（朝・帰りの会、給食等）と、学活・道徳・行事を関連づける。（振り返り等の活用） ①不登校要因の把握・分析 ②要因解消のための手立て立案・分析 ③取組の評価と改善 ②③について、今までの慣例にしばられない。	「自分の良さは周りの人たちから認められている（自己肯定感）」児童を８０%以上にする。（児童アンケート） 不登校児童を１５名以下にする。 （昨年度17名）	日々の学級活動の振り返りで肯定的な声かけを続けた。その結果、児童アンケートに対して、肯定的な回答をした児童は６８%だった。 不登校の要因の把握と分析、個に応じた取組を続けた。その結果、現時点で不登校児童は４名だった。	３	３	学級でめあてをもって達成感を味わわせたり、児童会を中心に挨拶の表彰をする場を設けたりする。 全教職員でベクトルを合わせ、児童の話を傾聴したり複数で問題解決にあたったりすることで、悩みの早期解決を目指す。 児童の欠席状況の把握を重視し、家庭訪問やヒアリングの頻度を増やす。 未然防止のため、一人一台端末の活用方法を模索する。	中間に引き続きの肯定的な振り返りや個を大切にした声かけ・掲示物などの取り組みを通して、肯定的な回答をした児童が６８%だった。 12月末時点で不登校児童は 12 名。 家庭訪問などの連絡体制を確立し、生徒指導通信などでその啓発に努める。 不登校児童や不登校が予想される児童に対して早期のケース会議を開く。	３	３	３	児童会や委員会の取り組みを活用して、頑張りがみられる児童が賞賛される場を意図的に作る。 全職員でベクトルを合わせる具体的な取組を行う。 例１　問題解決のためのフロー図 例２　ケース会議を開く基準 例３　生徒指導通信での情報共有 児童の欠席状況の把握を重視し、家庭訪問やヒアリングの頻度を増やす。

２	教職員が元気で働きやすい学校づくり		継続	教職員のやりがいの向上 授業づくり等、児童に向き合う時間の確保	校内研修等を通して、教職員が自らの持ち味を生かした取組を進める。 ・積極的な生徒指導の推進 ・児童、保護者との確かな人間関係の構築 ・主任層を核とした人材育成	「授業づくりなど学校内の活動で、失敗を恐れずに挑戦できる」教職員を８０％以上にする。 「授業づくりを行う時間が確保されると感じる」教職員を80%以上にする。（教職員アンケート）	毎学期校内で授業公開をして挑戦を行う機会の設定に取組んだ。その結果、教職員アンケートで、肯定的な回答をした教職員は61.1%だった。 毎週水曜日に教材研究ができる時間の確保や研修の精選に取組んだ。その結果、教職員アンケートで肯定的な回答をした教職員は73.7%だった。	３	２	職員同士で挑戦を共有したり、授業参観で感じた肯定的な場面を還元したりする機会を設けていく。 教務主任だよりを通して、タスクを示すだけでなく、いつタスクがこなせるかも示していく。	職員同士での実践したことを交流したり還元したりすることに取り組んだ。その結果、教職員アンケートで、肯定的な回答をした教職員は58.8%だった。 タスクを示すだけでなくタスクがこなせる時期や場面を見越しての周知に取組んだ。その結果、教職員アンケートで肯定的な回答をした教職員は 64.7%だった。	３	２	３	今年度行った活動（教材研究タイムや朝学習など）の成果と課題を集約し、来年度に向けて継続する意義や内容の見直しを行い、教育の充実や職員の時間確保に繋げる。

［プロセス評価の評価基準］

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ，状況の変化，問題が生じた際は，協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず，状況の変化，問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

［達成評価の評価基準］

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し，十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し，望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し，一定の成果をあげた。
2	目標を下回り，成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り，成果が認められなかった。

［総合評価の評価基準］

評点	評価基準	
5	１００％以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	８０％以上１００％未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	６０％以上８０％未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	４０％以上６０％未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	４０％未満の達成度	目標を達成できなかった。